

# フラメンコの樹

第6回

鈴木 真澄 (バイラオーラ)

Masumi Suzuki / 1958年中野生まれ。6歳でバレエ。12歳で新体操。15歳フラメンコ。18歳渡西。21歳結婚。22歳雄輔出産。23歳麻衣出産。25歳教室開設。26歳離婚。34歳雄輔渡西。36歳麻衣渡西。42歳会社設立。50歳初孫。60歳フラメンコ。俳句入門。



©GRASPANY

## 「方言が

## 大好き！」

結婚したばかりの頃、亡くなった主人がある日「おまえ、なまってるないか？」と……  
祖父も父も東京生まれで私は三代目の江戸っ子！と思っていたので「ええ？ 私は標準語話してるでしょう！」と反論したものの、育ててくれた祖母は茨城出身で母は会津の喜多方生まれ。ちよつと自信がなくなり問われるがままに、うで卵↓ゆで卵、カレー？ かわいい？、たばこ吸う？ すう？ なんだかわからなくな

っちゃった。苦笑

パセオから20年以上前に出版していたいただいたフラメンコ入門にはCDが付いていて、今は亡き間瀬さんにお世話になって録音した折、身体の軸？ ジク？ じく？ でテイク10くらいまでやったなあ笑。最後の最後に、夜中に間瀬さんのお宅で曲の紹介の演奏部分にヘッドホンを付けてハレオだけ1人で叫んで録音しましたね。間瀬さん、ありがとうございました。合掌

お話しは戻って方言。ところは変わってスペイン。マドリッドで勉強していた私は帰ってからいろんな人に「君のスペイン語はカステイジャーノ、標準語だね」と言われて、??? そうか、あれは皮肉だったのかなあ？ フラメンコやってるならアンダルシアなまりが当然だろうと。セビージャの中心にど〜んと構える天下のホテルアルフォンソ13世にドキドキ、ワクワクで行った時、フロントの人が「どっから来たんだ〜！ 中庭でゆっくりしてけ〜！」

五つ星でも思い切りなまってるのが楽しい！ フラメンコの友達と初めてのバルセロナ旅行の時、バルにて「ティントデペラノ！」(夏の赤ワインと言われるワインをサイダーで割った飲み物)と大きな声で注文した友達に、バル中の人が振り向いた。これはアンダルシア独特の飲み

物だったらしい……

同じ友達と朝、チョコラテコンチュロス(どろっとしたチョコレートに素揚げしたドーナツみたいなのをつけて食べる)を買いに行つて屋台で売ってるおじさまとのやりとり、「おめえ、どこでスペイン語習った？」「セビージャだ！」「やっぱなあ、おらもセビージャの出だあ〜！」すっかり意気投合。肌も白く、金髪も多く、フランスに近いせいか気質も似ているバルセロナの街中で、チュロス屋さんのおっちゃんとセビージャに留学していた友達との会話は、それはもう語り継がれる場面だった事間違いなしです。

月に一度ずつ熊本と郡山、福島にレッスンにうかがっている私は、「がー！ まちごーたー！」とか、「せからしか〜」など、びっくりしたり、意味がわからない時はあるのですが、その土地で生まれ育ち使ってきた言葉は素晴らしいと思うんです。熊本と福島とで比べると気候風土の違いが言葉や気質にも現れていたり……この感覚は熊本弁が似合うとか、これは福島弁がぴったりとか感じます。

みなさん私が行くと標準語を使うように気をつけてくれていて、私が帰るとホッと「もう、なまれるね」なんて。時には通訳が必要かもしれないけど、本当はバリバリその土地の言葉の中にいたいんです。ああ、ずいぶん行つてないなあ……みんなに会いたいなあ……コロナ、せからしか〜 もう、やんだぐなつちまっただおら〜 使い方がわかりますか？笑